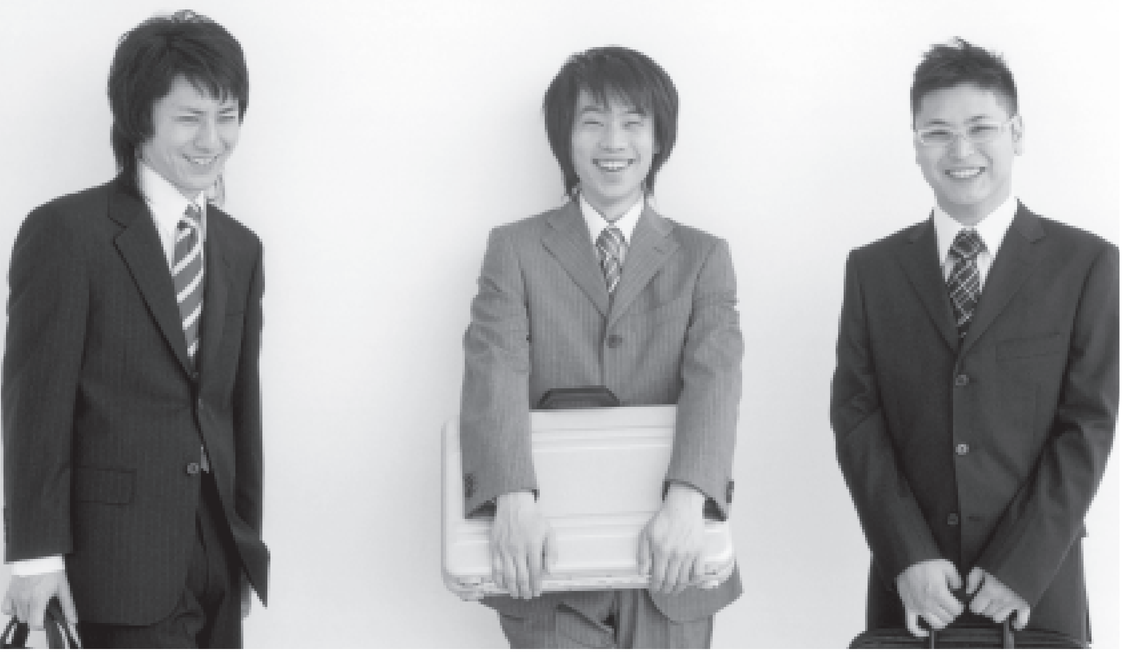
ロック界の鬼才が踏み出す新たな挑戦

キャプテンストライダム



L→R　Dr./Cho.菊住守代司　Vo./G.永友聖也　Ba./Cho.梅田啓介

ポップミュージックが持つ煌びやかさと、ロックバンドが持つダイナミズム、その両面を携えたロック界の鬼才・キャプテンストライダム。2月にリリースしたアルバム『108DREAMS』の興奮冷めやらぬ初夏、早くも新作をリリース。キャプストは一瞬たりとも止まらない。

●現在はアルバム『108DREAMS』レコ発ツアー「DREAM HUNTING TOUR」の真っ只中（取材は5/15）ですね。
永友：忙しいですけど楽しんでますね。今までにないくらいの楽しさです。
梅田：うん。ツアー初日が4/17の京都　磔磔だったんですけど、その数日後に今回リリースするシングル『風船ガム』のレコーディングがあって。いいテイクが録れたし、2月に出したアルバム『108DREAMS』の制作や今までのツアーでやってきたことを、いい具合に還元することが出来て。
●なるほど。
永友：『108DREAMS』はすごく作り込んだアルバムで、コーラスやギターを重ねたり、キーボードを入れたり。ポップでカラフルなアルバムにしようと思ってそうしたんですけど、ライブでそのまま再現することは難しいんですよ。だから言ってみればライブはレコーディング音源との勝負で、そのためには“自分たちが本気で楽しむ”ということが大きなテーマだったんです。
●はい。
永友：本当の意味でアルバムの真価が問われるのはこのツアーだと思うんです。そこで再びアルバムを作ったときと同じ集中力でライブに臨んで…バンドとしてあるべき姿というか、まさに充実してますね。最近はその密度が濃くなってて、リハスタでもどんどん休憩時間が少なくなってます（笑）。
●すごいなぁ。そんな忙しい中、引っ越しをしたメンバーがいるらしいじゃないですか。
永友：僕なんですが（笑）、いやぁ大変でしたよ。実は前に住んでた部屋はネズミがすごくて（※1）、忙しい中引っ越しました（※2）。
●それとHPの日記で読んだんですが、今回のツアーを勢いづけたのは直前の「NEW BREEZE 2006 at 大阪城野音」でのライブだったらしいですね。
永友：そうです。たくさんのミュージシャンが出演したイベントだったんですが、僕らの出番はけっこう後の方で。その日は朝からずーっと雨で、気温もすごく低くて。僕らの出番は開始から4時間後くらいだったので「お客さんはすごく消耗してるだろうな」と思ってステージに出たら、客席からの歓声がものすごくて。
●おお！
永友：要するにボールを受け取っちゃったんですよ。それで「ここで何か残すことがロックバンドの使命だ」って。気がついたら野音コール（※3）とかしてました。その日のライブは全力でぶつかっていくというか、自分を解放するというか。その経験が今回のツアーに活きてますね。
●今回のツアーは、5/13の恵比寿 LIQUIDROOMで観させていただきました。僕は個人的にキャプテンストライダムの演奏の“太さ”が大好きなんですけど、この日は期待以上で。ライブでしか観れないダイナミズムだったり、曲と曲の間をジャムって繋いだところとか（※4）、ものすごく良かったです。
梅田：このツアーでは、“ダイナミックにやろう”だとか“爆発的にやる”という共通意識があって。
●押し引きというか、お客さんを引っ張るところは引っ張って、突き放すところは突き放して…なんか、ライブの呼吸がすごく上手くなったような気がして。
永友：確かに構成とか曲順とか、リハーサルの段階からメンバー全員でトコトンまで突き詰めましたね。
●やはりそういう背景があったんですね。そして6/7にはニューシングル『風船ガム』がリリースになりますね。このシングルはアニメのテーマ曲であり、松本隆さんによる作詞であり、今までとは勝手が違ったと思うんです。失礼な話ですけど、タイアップとかメンバー以外の人による作詞とかは、バンドの軸がブレる怖れがあるほどのことだと思うんです。
永友：でも、そういう心配はあまりなかったんですよ。アニメはもともと好きだし、話をいただいたときは「どうせやるんだったら思いっ切りやろう」（※5）と決めて。
●あ、そうなんですね。
永友：90秒のTVバージョンを完成させたとき、アニメに合ってるだけじゃなくて、ポップだし、キャプストらしくてこれはアリだと思ったんです。ただ、『108DREAMS』の次に出すキャプテンストライダムの作品と考えたとき、「ちょっと違うな」という意識があって。
●確かにアルバムの次の作品となると、やはりひとつの方向性を示すものと考えますからね。
永友：そうなんです。当然アルバムで得たものは以降の作品にどんどんぶち込んでいきたいと思ってるので、TVバージョンも『108DREAMS』の延長線上なんですよ。打ち込みとかすでに使ってるし。
●はい。
永友：でも、むしろチャレンジするという意味で、バンド感を出したゴツゴツした世界と『108DREAMS』の華やかな世界を1曲の中で表現するということが、このタイミングでやりたいことだったんですよね。だからTVバージョンを録った後に、メインバージョンとして今回のシングルの1曲目をバンドで録って。
●なるほど。
永友：さっきのライブの話と共通しますけど、“演奏の楽しさを追求する”というところを、決して自己満足ではなくポップミュージックとして突き詰めたいと思って。バンドとして何で伝えるかと考えたときに、シンプルにギターリフのカッコよさとか、リズムのビート感であったり、ベースのグルーヴ感であったり…そういうところを更に一歩踏み込んでやりたかったんです。
菊住：TVバージョンを作ってみて気付いたことも多かったんです。曲の良さを突き詰める作業を経たあとで、別の目線で改めて3人で出すバンド感を見つめ直すことが出来て。だからTVバージョンも本当にやって良かったなって。
●それとカップリングの「夏のカケラ」ですけど、この曲は確か約1年前に作った曲ですよね（※6）。最初の形からかなり変わりましたね。
永友：そうですね。最初のイメージはまさにフォークだったんです。アルバムを作った後にアレンジしたらこういう形になりました。
●この曲を聴いて思ったんですけど、どうしてもキャプテンストライダムからは80年代くささは抜けないですね（笑）。
一同：（笑）。
永友：確かにU2や大沢誉志幸さんっぽい感じですよね（笑）。「風船ガム」とのコントラストを考えて、こういうカップリングにしたんです。
●この曲の歌詞ですが、いろんな解釈が出来る感じが僕は好きで。ほのぼのとしたラブソングとも解釈出来るし、別れの歌とも取れるし、終わった恋の歌とも解釈出来るし。微妙な空気感がなんとも言えなくて。
永友：表現したかったのはそういう淡いところなんですよね。“嬉しい／悲しい”っていうはっきりとした感情ではなくて、その間のふとした感情というか。そういうところを切り取った感じですね。
●僕は年を取って（※7）、ある時から“白か黒か”じゃない状態を許せるようになったんです。この歌詞は、もしかしたらそういう微妙な感情を表現してるのかな？ と思ったんですが。
永友：まさにそういうところを描きたかったんです。この曲はもちろんラブソングなんですけど、好きで好きでたまらないという高まりだとか、ダメになりそうな切なさとかではなくて。続いていく中での一瞬の感情とか場面だとか。そういうところにも意味があるような気がするんですよね。
●ああ、なるほど。この曲は1年前に初めてライブで聴いて「いつリリースされるのかな？」とずっと待ってたんですよ。
永友：弾き語りでも成立する曲なので、アレンジが難しかったんですよね。アルバムの制作を経てバンドとしてのアレンジに辿り着いたんです。
●それと今作ですごくアレンジに深みが出たという印象もあって。曲の魅力を最大限引き出すためのアレンジというか。
永友：「夏のカケラ」はアレンジとしては実験作というか。前半は淡々と進むようなアレンジにしたんですけど、こういうのは今まで出来なかったんですよ。今まではどうしてもイントロにフックを入れたり、サビにいくまでに何かドラマを入れたりしてて。
●はいはい。
永友：でもこの曲はさっきも言ったように歌詞で淡い世界を描いているので、過剰なアレンジが似合わないんですよ。そんな中でもストイックにならずに、作品として楽しめる曲にしたいと思って。なかなか難しいところを目指したんです。
梅田：息が詰まりそうなアレンジもちょっとね（笑）。
●確かにちょっと違いますね。
永友：だから「やっぱり弾き語りがいいのかな」って悩んで、色々考えたんです（※8）。
●いい仕上がりだと思います。ところでこの間の恵比寿　LIQUIDROOMのライブのMCで、秋の3ヶ月連続LIQUIDROOMマンスリーライブの開催を発表されましたよね。
永友：去年はアルバム制作で得たものが本当に多かったんですけど、次はライブで同じように何かを勝ち得たいと思って。まさにチャレンジです。まず3ヶ月連続でやるということを決めちゃったんですよ。
●内容を決める前に？
永友：はい。3ヶ月連続ってことは、「そこで新しい何かを見せる」と言ってるようなもんですからね。今年の活動の要になるようなことを、わかりやすい形でやりたくて。
●5/13の恵比寿 LIQUIDROOMはソールドアウトしてますから、決して無理な話ではないと思うんですが、普通だったら「LIQUIDROOMの次はAX」という感じでキャパ的なステップアップを考えると思うんです。でも、これはキャパよりも内容の充実を図った選択ですよ。
永友：キャパ的なステップアップだったら、今までの拡大版という気持ちで出来ると思うんです。でも3ヶ月連続LIQUIDROOMというのは、バンドとして新しいことへのチャレンジですね。先ほど「ライブでジャムったところが良かった」と言っていただきましたけど、例えばジャムセッションをやったり…3ヶ月連続だとそういういろんなことが出来ると思うんです。チャレンジの場としてはLIQUIDROOMも充分大きいですけど（笑）。
●じゃあ、プレッシャーはない？
永友：プレッシャーに感じるような悪いクセは段々なくなってきましたよ。もちろん何かを作ってる過程ではいろいろ悩んだり苦しんだりしますけど、外に向かって表現するときは楽しめるようになりましたね。

interview：Takeshi.Yamanaka

【地球と読者に優しいキャプスト註釈】

※1：広くていい部屋だったが、隣がソバ屋でネズミ好きには絶好のスポットだった。ちなみに、前の部屋でトイレ前のデッドスペースを漫画コーナーとして楽しんでいた永友は、新しい部屋でも漫画コーナーを設置。なんでもキッチンの一角にあるらしく、「カレーをコトコト煮込みながら漫画を読んでいる時間は最高ですね」と嬉しそうに語る。
※2：新潟でのライブの次の日が引っ越しだったが、予定よりかなり遅れて帰宅した永友。“海人”とプリントされたTシャツを着た引っ越し業者にものすごく叱られて落ち込んだ。
※3：ステージに出てすぐに思いついたまでは良かったが、スペルを間違えて“Y·O·A·N”コールとなった。
※4：「サイボーグ」～「マウンテン・ア・ゴーゴー・ツー」のジャムバンド的な繋ぎは圧巻。鳥肌が立った。
※5：TVバージョンのリズムは打ち込みなので菊住は叩いてない。話は逸れるが、永友はロックファン以前にアニメファンだったため、アニメタイアップはかなり気合いが入った。TVバージョンはアニメイト永友のこだわりが詰まっている。そしてどんどん話は逸れるが、永友が好きなアニメソングは山本正之モノ（タイムボカンシリーズ他）だとか。
※6：05/04/23@渋谷 CLUB QUATTROのアンコールにて永友が1人弾き語った曲。その日の朝に作った。
※7：インタビュアーは今年34歳。永友は今年30歳。
※8：最終的には大貫妙子的な仕上がりをイメージした。狙いが実に永友らしい。
※9：「風船ガム」のPVは、バンド感溢れる演奏シーンがメイン。映画「マトリックス」ばりのストップモーションを人力で実現している。要するにメンバーを静止させて撮影した。24時間掛かった。

【おまけ：最近のお気に入り】
梅田：ウィキペディア（webでユーザーが作り上げる多言語百科事典）
菊住：ツアー先々での散歩や神社仏閣散策
永友：神保町のボーイズカレーの「カレー付きハンバーグ」

【ライブ情報】

08/06　ROCK IN JAPAN FES.2006
08/13　服部緑地野外音楽堂「OTODAMA'06」

■ぷらっと九州ミッドサマー2006
アナログフィッシュとキャプテンストライダム
08/15　鹿児島 SR HALL
08/16　福岡 BEAT STATION

■リキッドルーム・マンスリーライブ
09/23　LIQUIDROOM ebisu
10/22　LIQUIDROOM ebisu
11/18　LIQUIDROOM ebisu

Single『風船ガム』（※9）

風待レコード /
ヤァ！ ヤァ！ ヤァ！ レコード
AICL-1748
￥1,223（税込）
2006.6.7 Release
http://www.captain-a-gogo.com/